

(平
三十一
前)

国

語

(問題部分1～11ページ)

注意

- ① 解答はすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。
- ② 経営学部の受験者は、一と二(1～8ページ)に解答し、三(9～11ページ)には解答しないこと。

国語 (経営学部以外) 一五〇点
国語 (経営学部) 一二〇点

— 次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。〈配点八〇点〉

人食について、おそらくわれわれはきわめて得体の知れない、まさしく心の奥底の濁のような忌避感をもつてゐる。

われわれは動物であり、一定のカンカク^(a)をもつて食物を摂取しなければならない。植物のように光合成をしてエネルギーをつくることもできないし、草食動物のように大量の草を反芻^{はんすう}することでいのちをながらえさせることもできない。何も食べ物がないときには、同種のものであれ何であれ、自らが生きるために食べる。食べなければ自分が死ぬ。

だがそこで、人食をなすかなさないかは、きわめて纖細な問題をひきおこす。大岡昇平は、あくまでもキリスト教理念をもちだしつつ「言葉」と「ロゴス」の世界でそれを敢然と拒絶する。だがわれわれは、さまざま動物が共喰いをすること、場合によつては、それは生態系的にも生存戦略的にも合理的な行為であるとのべることさえ可能である。

授業などでこの類いのはなしをすると、必ず学生が質問がある。それはアンパンマンをどう考えるのかということである。

ただ私自身は、アンパンマンの作者であるやなせたかしという人物についても、この絵本(というか、すでに一種のキャラクターとして、アニメその他で多種多様にフキュウ^(b)しているというべきだろう)についても、さして深く知つてゐるわけではない。ただアンパンマンが、おなかがすいた者に、自分の顔を「食べさせる」ということは知つてゐる。さらにいえば、それがやなせたかしの戦争従軍経験に依拠するものであるという事実も知識としてはもつてゐる。飢えのなかで何かできること、何かしてあげることとは、飢えている生き物、飢えている同僚に食べ物を与える以外にはない。そしてその極北が、自分を食べてもらうということでしかないこともよくわかる。

ただし、アンパンマンが「自分で食べてよ」といつて、自分の顔をむしりとつて食べさせる姿は、異様なフンイキ^(c)をかもしだすものではないだろうか。繰り返すが、アンパンマンが食べせるものは顔なのである(もちろん、このキャラクターにとつて顔がアンパンなのだから)。

この絵本の不思議さは、生命にとつて、そしてとりわけ四肢動物全般にとって、その人格性＝パーソナリティを決定する器官である「顔」がそもそも食べ物であり、さらにそれを惜しげもなくちぎつて相手に与えることにある。これは自分の肉を食べさせ、他人の肉を食べるというカニバリズムよりも、^(ア)さらに業の深さを感じさせる所作ではないだろうか。余談であるが、ヴェジタリアンのイギリス人の同僚が、切り身として皿にのつた刺身は食べられるが、焼き魚は食べられないと話してくれたことがある。逆に日本人にとつては、豚の丸焼きを連想すればわかりやすいだろう。顔を食べろというのは、たんなるカニバルなものではなく、相当な抵抗感をひきおこすものである。ところがアンパンマンは、顔こそを食べさせるのである。食べてはいけないものの最たる部分が食べ物であるという矛盾が、この絵本のもつとも重要で衝撃的な点ではないのだろうか。

ところがアンパンマンには、もうひとつ奇妙な細工がなされている。これもまた衝撃的であるのだが、アンパンマンの顔とは、いささか驚くべきことに、いくらでもとり替え可能なのである。アンパンマンは、おなかをすかせた者に自分の顔を食べさせると、ジャムおじさんというコックの身なりをした登場人物が、ぱつとアンパンマンの顔をいれ替える。アンパンマンの顔そのものは複製可能で、何度もとり替えがきき、かくしてアンパンマンというキャラクターが死んだりすることはない。

これが相當に不思議な事態であることはいうまでもない。顔というのは、繰り返しになるが、人間のみならず四肢動物にとって、唯一性を示す人格を顕示するものなのだから。「誰か」という判断は、ふつうは「顔」によってなされる。食べられる以上に、唯一的なものがとり替え可能であるということは、その設定をさらに奇妙にさせている。

アンパンマンの顔を食べるときに、実はさしたる罪悪感をもたないのは、それがごく常識的な「アンパン」の（欠片の）形象をしており、さらに上述のように一回食べても再生産されるものであるからだ。それゆえ、アンパンマンの顔がちぎれても、そしてそれがすば一つと飛んでいつても、そのこと自身には安心感すらある。^(イ)アンパンマンは個別的な存在でありながら、そうであるとはいいけれない。これについて、どう考えるべきなのか。

もちろん、そうである以上、アンパンマンを食べることはカニバリズムではない、という結論をだすことも可能だろう。再生されるということは、ちぎればまた生えてくる家庭菜園の野菜に近いともいえる。だが、それでもこれは人間のかたちをした

キヤラクターである。どう考えるべきか。

別の視点でとらえれば、肉を食べること、カニバリズムであることを論じながらも、実際にはわれわれは、われわれ自身の身体をあまりよくみていないのかもしれない。

人間の個別性は、実は顔という器官をのぞけば、さしたる違いはない。自分の内臓のレントゲン写真をみせられても、それが自分のものか他人のものかがわかるひとなどはほとんどない。顔という特殊な器官をのぞけば、実は身体は、人間同士であれ、また四肢動物同士であれ、実際には似たり寄つたりである。

さらに、もっと荒唐無稽なことをのべることもできる。顔とは人格性の中心があるので、さすがにアンパンマンの世界でしか、これを再生産することはできない。しかしながら肉ということであればどうであろうか。現代のさまざまな場面で、身体へのテクノロジーが増していくなか、近い将来人間は人間の肉を不用なものとして切り捨て、あるいは必要であれば再生できるかもしれない。現代におけるアンパンマンの類似物をつくることは、不可能なテクノロジーではないかもしれないのである。アンパンマンの教えは実はこちらにあるとも考えられる。

眞面目にいえばこのはなしはいくらでも現代テクノロジーのもとで拡張可能なのである。医学においては臓器移植という問題がある。これはもとより、飢えにキンするカニバリズムとはもちろん次元が違う。だが、自分が生きながらえるために他人を身体にとりこむという意味ではまさしく類似的行為である。臓器移植するというこの技術は、これ自身、別の方向から考えられるべきアンパンマン的なカニバリズムにもおもえる。初期の臓器移植は、ドナーが亡くなつたあと、その意思にしたがつて、血液型の一致や免疫不全をおこしにくい患者へと、臓器をばらして届けていった。ドナーの臓器は亡くなつたばかりの「新鮮な」ものであることが不可欠であつたので、「脳死」という、死の概念についての定義づけ変更さえおこなわれている。そこでは、これまで死んだと認識されていないひとを死んだことにして（そしてそれを科学的合理的な方法で、まさしくしたり顔で説明して）カニバリズムを可能にしたのである。私の勤めている学部の隣の医学部は、移植についてはきわめて重要な国の機関であるので、ヘリコプターが研究室の上空へ飛んでくるたびに、ああ、新鮮でぴちぴちとした臓器が届いたのだなという複雑な気持ちに

襲われる。

しかしそのうち、ある種の臓器については、生体肝移植に代表される生体移植がなされるようになつてゐる（死んでいなくてもよいのである）。これはますますアンパンマン的状況が広まつてゐることではないのか。それは誰かの（大抵は親族であるが）臓器を食している。口から食べるのではない。しかし生きるために身体にとりいれている。

この方向における「アンパンマンの未来」は、すでに、バイオテクノロジーの進展において明示されているだろう。iPS細胞から自己の臓器を形成すること、それが実際に応用され、現実的にリソロジイ^(e)の場面でもちいられることはまだ先かもしれない。だがもともと受精卵であつたES細胞をもちいた臓器のテクノロジー的形成が、「可能的に子供になりうる細胞」という素材であり、やはりカニバリズム的側面があつたことを考えると、iPS細胞が理念的には自己^(f)生成する細胞であることには意味がある。これは自食のカニバリズムであるとさえいえる。自己犠牲と自己^(g)を救うことの回路が完結したこの場面では、カニバリズムは一個体のなかで完結してしまうことになる。

アンパンマンからは遠く離れてしまつたかもしれない。だが飢えの問題から出発して、臓器移植に辿りつき、さらにiPS細胞による自己の身体の複製化には、そこで使用される臓器がいくらでも複製可能であることにおいて、アンパンマンのいれ替わる顔という知見は、いつそうひき延ばされているのだろう。それはおそらく、われわれの個別性、私のパーソナリティ、私の個別のいのちという事情を、しだいに消し去りつつあるのかもしれない。^(h)無限複製されるアンパンマンの顔の自己犠牲は、おそらくやなせがおもいつきもしなかつた卓見を含んでいるのだろう。

世界思想社教学社 一〇一八年 （檜垣立哉『食べることの哲学』より、一部省略）

〔注〕 ○大岡昇平——小説家・評論家（一九〇九～一九八八）。カニバリズムを扱つた『野火』などを手がけた。

○ロゴス——「理性」などを示すギリシア語。

○ドナー——臓器の提供者。

○脳死——脳全体の機能の停止状態を指す。

○生体移植——生きている人の臓器を他人に移植すること。

○iPS細胞——人工多能性幹細胞。ES細胞と同じく、あらゆる組織・臓器に分化しうる万能細胞。

問一 傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。はつきりと、くずさないで書くこと。

問二 傍線部(ア)「さうに業の深さを感じさせる」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(イ)「アンパンマンは個別的な存在でありながら、そうであるとはいき切れぬ」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(ウ)「ますますアンパンマン的状況が広まっている」とあるが、どういうことか。臓器移植の事例に即して、八〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(エ)「無限複製されるアンパンマンの顔の自己犠牲は、おそらくやなせがおもいつきもしなかつた卓見を含んでいるのだろう」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨を踏まえた上で、一六〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。（配点四〇点）

今は昔、越中の守藤原為善といひける博士の子に、惟規といふ者あり。為善が越中守になりて下りける時に、惟規は当職の蔵(のぶのり)にてありければ、え具しても下らずして、叙爵して後にぞ下りけるに、惟規、道より重き病つきたりけれども、然りとて道に留まるべきにあらねば、構へて下り着きにけり。国に行き着ければ、^(①)限りなる様になりにけり。父為善、惟規下ると聞きて、喜びて待ちつけたるに、かく限りなる様なれば、あさましく思ひて、嘆き騒ぐこと限りなし。

さて、万(よろづ)にあつかひけれども癒えずして、無下に限りになりにければ、「今はこの世のことは益(やく)なかり。後の世のことを思へ」と言ひて、^(②)さとりあり、やむごとなかりける僧を枕上に据ゑて、念佛など勧めさせむとしけるに、僧、惟規が耳に當て教へけるやう、「地獄の苦患(くげん)はひたぶるになりぬ。言ひ尽くすべからず。まづ中有(もうちゅう)といひて、生いまだ定まらぬ程は、遙かなる広野に鳥獸などだになきに、ただ独りある心細さ、この世の人の恋しさなどの堪へ難さ、推し量らせたまへ」など言ひければ、惟規これを聞きて、息の下に、「その中有の旅の空には、嵐にたぐふ紅葉、風に隨ふ尾花などの本に松虫などの音などは聞こえぬにや」と、ためらひつつ息の下に言ひければ、僧、憎さのあまりに、いと荒らかに、「何の料(れう)にそれをば尋ねたまふぞ」と問ひければ、惟規、「然らば、それらを見てこそはなぐさめめ」と、うち休みつつ言ひければ、僧、この事を、「いと狂ほし」と言ひて逃げて去にけり。

父、「なほ働く限りは」と思ひて、添ひゐてまもりければ、惟規、二つの手を挙げてかよりけるを、心も得で見るたりけるに、傍らなる人、「もし物書かむなど思すにや」と心得て問ひければ、うなづきければ、筆をぬらして、紙を具して取らせたりければ、かく書きたりけり。

都にもわびしき人のあまたあればなほこのたびはいかむとぞ思ふ

と書きけるに、果ての「ふ」文字をばえ書き果てて息絶えにければ、父なむ、「然なめり」と言ひて、その「ふ」文字を書き添へて、「形見にせむ」とて置きて、常に見つつ泣きければ、涙にぬれて果てには破れ失せにけり。父、京に帰り上りて語りければ、その

頃、これを聞く人いみじくあはれがりけり。

これを思ふに、いかに罪深かりけむ。^(B)三宝のことを心にかけて死ぬる人、なほし悪道を逃ることは難かなるに、これは、ひとへにその方をば離れければ、悲しきことなり。かくなむ語り伝へたるとや。

（『今昔物語集』より）

〔注〕 ○藤原為善・惟規――平安時代の貴族。

○当職の一現職の。

○中有――死後、次の生が決まるまでの四十九日間。

○かよる――近づけるしぐさをすること。

○三宝――仏教で重視されている、仏・法・僧のこと。

○悪道――現世で悪事を働いた者が、死後行くことになる苦しみの世界。

問一 『今昔物語集』と最も成立年代の近い作品を次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 『伊勢物語』 □ 『土佐日記』 ハ 『日本永代蔵』 ニ 『風姿花伝』 ホ 『枕草子』

問二 二重傍線部(a)～(c)の「せ」の文法的な説明として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。同じものを二回以上選んでもよい。

- イ 助動詞「す」の未然形 □ 助動詞「す」の連用形 ハ 助動詞「さす」の未然形の一部
ニ 助動詞「さす」の連用形の一部 ホ 動詞「す」の未然形 ヘ 動詞「す」の連用形

問三 波線部①～④を、それぞれ現代語訳しなさい。④は「然」の内容を明らかにすること。

問四 傍線部A「逃げて去にけり」とあるが、僧がそのように行動した理由を六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部Bについて、作者はどういうことを評して罪深いと言っているのか、五〇字以内で説明しなさい。

※末尾に問題訂正あり

三 次の文章を読んで、問一～四に答えなさい（設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある）。（配点三〇点）

初、孫權謂^{ヒテ}呂蒙^ク曰^ハ「卿今當^リ塗掌^{ルニ}事、宜^シ學問以^シ自開益。」蒙辭^{スルニ}以^{テス}軍中多務。權曰^ク「孤豈欲卿治經為博士邪、但^ダ當涉獵、見^ル往^(ア)事^ヲ耳。卿言^ニ多務、孰^{たれカ}若^レ孤。孤常讀^ミ書、自^ラ以^シ為^{リト}大有^レ所^{スル}益^レ。孔子言^{ヘラク}『終日不^レ食^ハ、終夜不^レ寢^ハ、以^テ思^{フモ}無^レ益^シ、不^レ如^ル學^ハ也^ト。』光武當^リ兵戈之務、手^ハ不^レ釈^カ卷^ヲ。孟德亦自謂^フ老^{ヒテ}而好^{ムト}學^ヲ。^(A)卿何獨不^ニ自勉勵^{ベんきよく}邪[。]蒙乃^③始^{メテ}就^ク學[。]

後、魯肅過^{ヨガリ}尋^陽、與^レ蒙論議、大驚^{イニキテ}曰^ク「吾謂^{フニ}大弟但^{ハル}有^ニ武略^耳、今者才略、非^二復^④吳下阿蒙。」蒙曰^ク「士別^{レテ}三日、即^ニ更刮目^{シテ}相待^{ツベシ}。大兄^{何見^ル事^ヲ之晚^キ乎。」}

〔『資治通鑑』をもとに『江表伝』により改変〕

〔注〕

- 孫權——三国時代、呉の建国者(呉大帝)。在位二二二一～二五二一年。
- 呂蒙——呉の武将。生没一七八～二一九年。
- 当塗——要路にいること。重要な地位にいて権力を握っていること。
- 孤——中国古代の王侯の自称。わたし。
- 治経——『礼記』『春秋』などの經典を学んで身につける。
- 博士——儒教を教授する官職。
- 涉獵——書物を広く読みあさること。
- 光武——後漢初代皇帝の光武帝(劉秀)。在位二五～五七年。
- 卷——卷物。書物。
- 孟徳——三国魏の始祖(魏武帝)である曹操の字。あざな。生没一五五～二二〇年。
- 勉勵——つとめ励むこと。努力すること。
- 魯肅——呉の武将。生没一七二～二一七年。
- 尋陽——地名。現在の中国江西省九江市。
- 大弟——年少の男性に対する呼称。
- 呉下阿蒙——かつて呉にいたときの蒙君。「阿」は相手を親しんで呼ぶ際にその姓や名につける接頭語。
- 刮目——目をこすつてよく見る。
- 待——遇する。そなえる。
- 大兄——年長の男性に対する呼称。

問一 二重傍線部①「宜」、②「以為」、③「乃」、④「復」をすべて平仮名で書き下しなさい（現代仮名遣いでよい）。

問二 傍線部(ア)「孤豈欲卿治経為博士邪」、(イ)「卿言多務、孰若孤」をそれぞれ現代語訳しなさい。

問三 傍線部(A)「卿何独不自勉勵邪」について、「独」とあることに注目し、本文に即して意味を補い現代語訳しなさい。

問四 波線部「大兄何見事之晚乎」における「事」とは、だれのどのような状況を指すのか、本文に即して六〇字以内で説明しなさい。

(平3 1前)

問題訂正

国語

訂正箇所	9ページ 第三問 問題文 3行目
誤	正
自ラ ^② 以為大イニ有レリト所レ益レスル。	自ラ ^② 以為大イニ有レリト所レ益スル。